

日語初級學習者之難辨音分析

陳 貞雯

文藻外語學院日本語文系講師

陳 淑瑩

文藻外語學院日本語文系助理教授

2009年10月23日發表，11月17日接受送外審，12月25日受理

摘 要

以中文為母語者為對象的日語音聲研究為數眾多，其中有不少的研究指出，母語的干涉對於學習者之發音與聽力的影響頗大。對於此母語干涉問題仍有不少從事日語音聲教育的教師、學者們努力的探求其解決與改善的方案。

本文參照先進們的研究成果，以學習者最為困難之音聲項目為主，進行問卷調查與聽力練習。期許藉由此練習讓學生能意識到自身在音聲聽力上的困難點，進而培養日後自我修正與學習之能力。將聽到的音正確的書寫下來，是確認聽解力的方法之一，也是書寫能力的基礎，因此本次聽力練習也放入了聽寫能力的訓練。

此次調查結果，並不能斷言有效的提高了學生的學習效果，但是卻也讓學生意識到自身在音聲聽力上的問題點，不僅在聽力學習，在日後文法、語彙、作文等等地日文學習上亦能有所助益。

關鍵詞：難辨音、聽解能力、初級聽力、進修部

A Study of the Discrimination between Difficult Phonetics in Beginning Learners of Japanese

Chen Jen-wen

Lecturer, Japanese Department, Wenzao Ursuline College of Languages

Chen Shu-yin

Assistant Professor, Japanese Department, Wenzao Ursuline College of Languages

Abstract

There are numerous studies on Japanese phonetics and **pronunciation** which Chinese learners of Japanese are the targets. Among the studies, many researchers have found out the influences and interferences between one's mother tongue and the acquisition of a new language **especially** in **listening** ability and **pronunciation**. Many Japanese language teachers and scholars are still seeking solutions to deal with this mother-tongue interference in foreign language learning.

This article consults the researches from the advanced educators and conducts a survey and listening practice by using some difficult acquired phonetic combinations as the subject. This exercise aims to enable students to realize their own weaknesses in distinguishing different Japanese phonetics, and to cultivate for the ability of self-correction and self-learning. Being able to accurately transcribe one sound while listening is one of the methods to ascertain the ability of listening comprehension, which is also the basics of writing. Therefore, this listening exercise also includes the training of dictation ability.

Though the result of this survey cannot successfully prove the effectivity of the increase of students' learning outcomes, it indeed enables student to realize their own weaknesses in recognizing certain sounds. It is expected to be helpful for not only the training in listening comprehension but as well in learning Japanese grammar, vocabulary, and writing.

Keywords: discrimination between difficult sounds, listening comprehension, basic level listening, continuing education

初級聴解授業における苦手意識のある音について

陳 貞雯

文藻外語学院日本語学科講師

陳 淑瑩

文藻外語学院日本語学科助理教授

要旨

中国人母語話者における日本語の音声については、これまでさまざまな研究がなされてきた。母語の干渉は、学習者の発音・聴取に大きな影響を与えているということもよく指摘される。その解決や改善方法については、これまでも音声教育現場で、多くの研究者たちが探求し続けている。

本稿は、先行研究を踏まえながら、学習者が特に苦手とする音声項目に焦点を当て、アンケート調査と聴取練習の実施を行った。これにより、学習者に自身の聴取上の問題点を意識的に捉えさせ、自律的学習を促す自己モニター能力も養成できるように音声の聴取指導を行った。また、正しい表記は正しい聴取を把握する方法の一つであり、学習者の書く能力を養成する重要な前提条件となるため、聞いて正確に記述できるように、表記面からの練習と併せて行っていくことが必要であると考えた。

今回の練習を行ったことで学習効果を上げたとは言い切れない点があるが、学習者自身に音声に対する問題点を捉えさせ意識させることで、聴解力だけでなく、今後の学習における文法、語彙、作文の習得などにも影響を与えると考えた。

キーワード：苦手意識、聴解力、初級レベル、夜間部

はじめに

中国人母語話者における日本語の音声については、これまでさまざまな研究がなされてきた。母語の干渉は、学習者の発音・聴取に大きな影響をしているということもよく指摘される。その解決や改善方法は、これまでも音声教育現場で、多くの研究者たちが探求し続けている。

母語音声の干渉・影響される聴取の問題は、初級レベルだけでなく、中・上級でも悩んでいる学習者多くいる。この問題は、長期的、定期的に練習に取り入れなければ簡単に解決できることではないのも周知の事実である。しかし、現場の実際問題として音声教育の中の聴取練習に割ける時間はそれほど多くない。

そこで、学習者に今どのような聴取問題があるかを自ら意識させ、そこから相応しい練習方法、さらに自己評価の仕方を教え、自分一人でも継続学習していけるような自己モニター能力を身につけることが音声教育で最も大切なことであり、有効な解決方法の一つであると考えた。

本稿は、先行研究を踏まえながら、学習者が特に苦手とする音声項目に焦点を当て、アンケート調査と聴取練習の実施を行った。これにより、学習者に自身の聴取上の問題点を意識的に捉えさせ、自律的学習を促す自己モニター能力も養成できるように音声の聴取指導を行った。また、正しい表記は正しい聴取を把握する方法の一つであり、学習者の書く能力を養成する重要な前提条件となるため、少なくとも聞いて正確に記述できるように、表記面からの練習と併せて行っていくことが必要であると考えた。

以前、初級聴解（必修科目）のクラスに聴解ストラテジーの「情報選別」「ノート取り」「モニター」を取り上げて、練習方法を授業に取り入れた。¹「ノート取り」を指導する際、学習者に「意味の分からない言葉があれば、聞き取った音をそのまま書きなさい。後で意味を調べることができるので。」と教えたが、その書き取ったメモを見ると、かなり誤った日本語表記が見られた。聞いた音をそのまま書き取ることは音声の認識状況が明瞭に表示されるということであり、学習者の表記上の誤りは音声聴取の誤りとも考えられる。

その誤りが学習者の不注意から生じたものであればともかく、日本語に対する知識の不足から生じたものであるとしたら、その原因と問題点を究明して適切な対策を立てなければ、学習者の聴解力にも影響を及ぼすと思われる。

「聴く」ことには、音の識別と内容理解の二段階があり、聞いた音がどの音であるか

¹聴解ストラテジーに関しては、陳淑瑩、陳貞雯（2008）「聴解ストラテジーの教授による聴解力向上への影響-文藻外国語学院夜間部の初級聴解授業を中心に-」『2008 第五屆海峽兩岸外語教學研討會』2008. 11. 1 を参照。

を識別する音声レベルの聴取と、発話内容を理解するものがある。いわゆる、音声の識別は内容理解の土台となるものである。音の識別ができることはその言語を聞き取れる第一歩であり、一音一音を正確に聞き取って積み重ねていく能力は初級学習者の聴解授業の第一課題であると言えるだろう。その「ノート取り」授業の反省から、学習者はどのような音声が聞き取りにくいのか、困難点は何なのかを明らかにし、それらを強化するための教え方を工夫する必要を感じ、今回の調査研究を実施したものである。

1. 聴取の困難点

適切な指導を行うためには、まず学習者の持つ問題の原因を理解する必要がある。中国語母語話者の学習者にとって、その音声聴取が難しいと予想されている日本語音声項目については、すでに多くの日本語教育研究者たちによる研究結果が報告されている。本稿では、(1) 特殊拍（促音・長音・撥音）(2) 清濁音（無声破裂音・有声破裂音）の項目を取り上げ、困難点、またその原因を分析し、それらを踏まえて解決方法を考え、学習者の聴取力を向上させる指導法を模索した。教師は知識や練習方法を積極的に与えることにより、学習者が繰り返し練習していくうちに困難な学習項目も克服していくと考える。

1.1 特殊拍

特殊拍の問題は、中国語母語話者に限ったものではなく、多くの外国人学習者にもその習得が困難であることが指摘されている。中国語母語話者にとっての聴取問題は、特殊拍を含む語を特殊拍がないように、特殊拍がないのに特殊拍を含むと錯覚してしまうことである。つまり、特殊拍の有無がはっきり弁別できないのである。発音の問題としては、特殊拍の持続時間が短すぎると言われている。学習者にとって特殊拍が難しいのは、これらの音はほかの仮名と違い、実際に決まった音がないということである。

簡単に説明すると、長音は「前の母音を長くする」、促音は「次にくる子音と同じ口の構えをする」、撥音は「後ろにくる音と同じ口の形のまま、鼻に息を抜く」ことである（国際交流基金 2009）。もう一つの原因は、これらの音がほかの音と同じ一音節であることを意識していないことにある。彼らの頭の中ではこれらの音が非常に抽象的であるために、ほかの仮名と同じぐらいの長さで発音できないため意味が変わってしまうのである。中国語には日本語のように前後の母音や子音の「長さ」で意味を区別するという概念がないので、特殊拍は習得しにくい音声項目になっている。

初級の発音教育においては、特殊拍を脱落しないようにするために、だいたい同じ時

間の長さで発音される「拍」の学習を重視し、特殊拍をもっと長く発音するように工夫して指導している。しかし、現実の会話での日本語の音声は、これらの特殊拍が「拍」通りの持続時間を持つことはむしろ少ない。戸田（1998）は、特殊拍には常に一定の「適切な」長さというものは存在せず、日本人話者は発話速度に対応して、特殊拍の有無を判断している。つまり、特殊拍の時間の長さは相対的なもので、絶対的なものではないということも指摘している。ほぼ等時の長さをと要求される学習者にとっては、このような実際の持続時間や相対的な時間の長さが特殊拍の聴取の支障を来す原因になっていると考える。

本稿では、日本語音声の特徴である「拍」の重要性を再度学習者に意識させ、聴取練習を通して、この拍感覚を身につけさせようと考えたものである。さらに、発話速度に対応した聴取ができるようになるためには、スピードがやや速い文も取り入れ、特殊拍の有無の聴取を練習した。

1.2 清濁音（無声破裂音・有声破裂音）

清音・濁音では、破裂音パ行バ行、タ行ダ行、カ行ガ行と破擦音サ行ザ行に分類されている。破擦音は個人差があり、習得しにくい学習者もいる。本稿では発音・聴取で最も目に付きやすい破裂音に焦点を当てるため、便宜上破擦音を除く清濁音の対応という形で論じる。

清濁の区別は発音・聴取とも非常に難しい。その原因が中日両言語の音韻体系の差異であることが従来から指摘されている。この差異は、中国語では有気音（息がつく音）、無気音（息がつかない音）という「気流の有無」を音の弁別的特徴にしていることと、日本語では無声音、有声音という「声帯の振動」の有無を弁別的特徴にしているという違いから来るものである（国際交流基金 2009、坂本 2002）。多くの学習者が日本語の無声音パ・タ・カ行を中国語の有気音（注音符号で表すと、ㄆ・ㄊ・ㄎになる）で、有声音バ・ダ・ガ行を無気音（注音符号で表すと、ㄅ・ㄊ・ㄎになる）で発音する傾向がある。清濁に関して、実際には発音よりも聞き取りの方が難しい。これは日本語の無声音・有声音の対立を、中国語の有気音・無気音の対立と捉えて発音すれば、少々不自然だが音の識別が混乱しないということであるが、聞き取りにはこのような便宜上の解決方法がないのである。

劉（2004）、西郡等（2004）の実験には、清濁音の聞き分けは、語頭では混乱がないが、語中語尾では混乱すると述べられている。語頭の清音・濁音は学習者が聞き取りをそのまま当てはめれば（清音→有気音、濁音→無気音）問題なく弁別できるものであるが、

語中語尾の清音は語頭の場合より呼気が弱くなり、中国語の無気音（濁音と対応）と混同してしまうからと解釈されている。学習者にとっては、自分の耳には同じように聞こえる音を異なる音として弁別するのは極めて困難なことである。困難だからこそ、繰り返し聞かせ、聞き取れるように努力する必要があると考え、本研究では清濁の聞き分けに学習者の注意を喚起して、何度も聞くことでその違いを段々認識していくようになり、耳で区別しにくい音声の違いを弁別できるように促した。

2. アンケート調査

2.1 調査対象と時間

本稿は、文藻外国語学院日本語学科夜間部 2 年生の初級聴解（必修科目）の A、B 両クラスを対象に調査したものであり、実施期間は、2009 年 3 月 17 日から 2009 年 5 月 26 日までの 8 週間である。

2.2 調査方法

調査は、三段階に分けた。「授業前アンケート」（以下「前ア」と略称）、「聴取練習」と「授業後アンケート」（以下「後ア」と略称）の三つである。「前ア」は、「聴取練習」に入る前に取ったアンケート調査であり、このアンケートから学習者が音声に対するイメージと学習者が聞き取りにくい音がどれであるかの解明に役立つと考え、実施したものである。

次に、「前ア」のデータに基づき 8 週間の「聴取練習」を実施する。最後は、練習後に学習者がどれくらいの変化があったかを調査したのが、「後ア」である。「聴取練習」の進め方については、以下のように説明する。

2.3 聴取練習の実施

今回の聴取練習は、週に 1 回、1 回 10～15 分程度、8 回で構成される。促音、長音・撥音、清濁音、復習の順序で各 2 回ずつ進む。また、学習者が授業後でも復習できるように、授業中使用されたモデル音声やディクテーションの SCRIPT は、毎週学内の E-learning サイトにアップロードすることにした。使用教材と実施の概要は、以下のよう一部の練習例を示しながら説明する。

2.3.1 使用教材

河野俊之など（2004）『1 日 10 分の発音練習』くろしお出版

戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク

川口さち子など (2003) 『上級の力をつける聴解ストラテジー』 上、凡人社

佐々木仁子、松本紀子 (2004) 『新基準対応日本語能力試験対策聴解篇』
大新書局

国際交流基金 (1991) 『発音』 国際交流基金

土岐哲、村田水恵 (1989) 『発音・聴解』 荒竹出版

2.3.2 特殊拍

特殊拍の存在は、周囲の音の聴取に影響を及ぼすことがあるので、実施期間の前半に集中して練習を行う。練習する前に特殊拍の重要性、いわゆる音が一つ違うだけで意味が変わるわけであるから、コミュニケーション上もとても大事だということを認識させる。練習は語彙レベルから短文レベルまで、書き入れる練習、特殊拍の有無、特殊拍が幾つあるか、などの特殊拍音節についての聞き取りをする。また、特殊拍が入るかどうかを聞くだけでなく、正しく表記できることもこの授業の狙いの一つであるため、短文のディクテーションの練習もする。

①促音に関する練習

練習1 単語レベルの書き入れ練習

モデル音声を聞いて、促音を書き入れる練習である。

例1 くっせっつ

例2 バっスっケっト

練習2 文レベルの書き入れ練習

例1 「サイズはいかがですか」「ええ、びたりです」

例2 みともないから、そんなかこうするの、やめなさい。

練習3 促音の有無の聞き取り練習

これから聞く文の中には促音がいくつ含まれているかという練習である。

例1 [モデル音声] ここに切手を貼ってください。() 答え: 2 例2

[モデル音声] さっきからずっとそう言ってるでしょう。() 答え: 3

練習4 ディクテーション

練習3と同じモデル音声でディクテーションさせ、平仮名で書き取るように求める。

例1 ここに(きって)を(はって)ください。

例2 (さっき)から(ずっと)そう(いってる)でしょう。

②長音・撥音に関する練習

練習1 拍感覚の練習

拍感覚を定着させるのは難しいので、拍の練習で授業を始める。

例 () の言葉は、abcde のどれですか。

例1 [モデル音声] おかねですか。おかねです。 答え：c

例2 [モデル音声] プレゼントですか。プレゼントです。 答え：b

- | | | |
|-------------------|-----|---|
| ① () ですか。() です。 | • a |  |
| ② () ですか。() です。 | • b |  |
| ③ () ですか。() です。 | • c |  |
| ④ () ですか。() です。 | • d |  |
| | • e |  |

練習2 単語レベルの書き入れ練習

モデル音声を聞いて、長音を書き入れる練習である。

例1 おべいい 例2 どそかい

練習3 伸ばす音の有無の聞き取り練習

「～です」の「～」の中に長い音があります (○) か、ありません (×) かという練習である。

例1 [モデル音声] たなかせんせいです。() 答え：○

例2 [モデル音声] やまだかずおです。() 答え：×

練習4 ディクテーション

例1 (とうきょう) から (こうべ) まで、どのぐらいですか。

例2 (おしょうがつ) に、白い (コート) を着て来たそうだね。

2.3.2 清濁音

先行研究によると、清濁音の聞き分けは語頭ではそれほど困難ではないが、語中語尾では困難だという結果が出ている。したがって、聴取練習を行うときは学習しやすい語頭の清濁音から学習しにくい語中語尾へ、また、単語レベルのミニマルペアの発音・聞き分けから文レベルのディクテーションへと進んでいく。

最初は中国語で日本語との音声体系の相違を簡単に説明することにより、清濁の問題点や、うまく聞き分けられないのは自分一人だけではないということも認識させて練習する。

練習1 語頭の清濁音

モデル音声の後についての発音練習である。学習者に発音しながら、自分の発音した音を聞くように注意する。

- 例1 パイ ばい
例2 カード ガード
例3 たいがく だいがく

練習2 語中語尾の清濁音

どちらを言ったかを選ぶというミニマルペアでの聞き分け練習である。

- 例1 せんぱい せんぱい しんぴ しんぴ
例2 あげる あげる かき かぎ
例3 いたい いたい あした あしだ

練習3 ディクテーション

穴埋めや振り仮名を書かせ、清濁の表記を確認する。

- 例1 (パンや) の (るすばん) をした
例2 会館かいかんの外観がいかんはすばらしい。
例3 (てんき) が悪いので、(でんき) をつけた。

2.3.3 復習

7回目の授業は総合的な練習の時間であるが、清濁音の練習時間が少ないので、この時間を少し借りて復習する。

練習1 清濁音の復習 (ディクテーション)

- 例1 この高校こうこうでは、たばこすを吸うと (たいがく) になります。

練習2 総合的な練習

言っている言葉はどれか、選びなさいという練習である。

- 例1 1、じゃっこう 2、ぎゃっこう 3、きゃっこう 4、ぎゃっこう
例2 1、しゅちょう 2、しゅつちょう 3、しゅうちょう 4、しゅうちゅう

8回目は復習テストを行う。毎週練習する授業内容を復習してもらうために、1回目の授業時に復習テストを予告する。試験問題は授業中使用したプリントから取り上げて作ったものである。

2.4 自己評価

本研究は学習者に今どのような聴取問題があるかを意識させ、さらに自分の学習効果

を評価し、自己モニター能力を身につけることも目指している。「前ア」や8週間の「聴取練習」を通して、自身の問題点を意識させた上、どの音が上手く聞き取れるようになったか、どの音がまだ聞き分けにくいかを反省しながら、学習効果を自己評価させ、「後ア」を実施する。このような反省や自己評価により、学習に対する自分の弱点や個人努力の重要性を認識させ、自律的学習の促進にも役割を果たしたと考える。

3. 調査結果

アンケート調査の回答タイプは、単一回答、複数回答と自由回答がある。「前ア」と「後ア」は、単一回答と複数回答を中心に設問した。ただし、「前ア」と「後ア」の第10問²と第11問だけは、自由回答となっている。単一回答では、アンケート紙に「非常に同意する」かどうかの5段階評価で5が最高点、1が最低点の「非常に同意しない」である。

回収されたアンケート紙の有効率については、Aクラスの下半期履修者数45人、Bクラスの下半期履修者数42人。その中で、未回答と無効³のアンケート紙を除くとAクラスの有効アンケート紙は39枚、Bクラスは34枚となる。アンケート有効率は、それぞれ87%と81%の8割以上である。

3.1 聞き取りに対する不安

「前ア」第2問の「授業中に聞いた日本語は、一つ一つの音をきれいに聞き取れないと不安になる。」に対する回答に、「はい」と答えた人は7割であった。初級学習者にとって日本語を聞く時、耳に入るものは文章より語彙単位であり、音単位である。しかし、聞いた音が認識できないと語彙を組み合わせることもできない。当然、文章を成立させられない。したがって、初級学習者にとって聞いた音を正確に認識することは、聴取が上手くなる先決条件である。また、第2問と第3問の「発音の良し悪しは、聴解と大きく関わりがあると思う。」の平均数値とクロス集計したものを表1にした。

表1によれば、殆どの学習者は、発音の良否と聴解が相関していると思っていることを意味している。教師が聴解の授業で日本語の音を正しく識別させる際、発音の指導も同時に進行させなければ、学習者の聴解に対する不安を解くことができないであろう。

そこで実際に学習者はどの音に対して、聞き取りにくいという意識があるかを調べた。まず、「前ア」第10問の「自分が最も聞き取れない音」を自由回答させた結果、促音、

²「後ア」第10問は、単一回答と自由回答となっている。

³今回対象とする学習者は、初級レベルであることから、「前ア」の第1問「日本語学習歴」にC(4-6年)とD(6年以上)を選んだ学習者は除外した。

長音、清濁音、鼻音、濁音と半濁音などが主であった。そして「前ア」第 4 問から第 6 問は、促音、長音、清音と濁音の聞き分けに対して学習者がそれらを聞いて書き取ることが出来るかどうかを調べ、統計した結果を表 2 のようにまとめた。

表 1 不安になる要素

クラス	問 2	問 3	総計 (人)
PJ2A	A (は い)	4.3	26
	B (いいえ)	4.2	13
PJ2B	A (は い)	4.2	26
	B (いいえ)	3.9	8

表 2 苦手意識のある音

	Q4 (促音)	Q5 (長音)	Q6 (清濁)
PJ2A	2.5	2.4	2.4
PJ2B	2.5	2.3	2.1

表 2 を見ると、学習者は促音、長音、清濁音の聞き分けともに苦手意識をもっていることが分かる。また、B クラスの方は、清濁音の聞き分けに最も不慣れである。これらの音に対する苦手意識を改善するため、前述した聴取練習を授業に取り入れた。

また、正しく聞き取れない音はどれかを複数回答させた結果、「じえ」と「ぜ」、「い」と「ん」の分別に困っていることがわかった。これは、音節 (拍) に対する認識が不足しているためと考えられ、拍の学習にも重点を置きながら聴解練習を行うことが必要である。また、発音の仕方の解説で学習者の疑問を解くことが求められる。

表 3 きれいに聞き取れない音

	だ行とな行	だ行とら行	じゅとぞ	じえとぜ	いとん
PJ2A	10%	15%	17%	25%	32%
PJ2B	20%	15%	19%	22%	24%

3.2 聴取練習後のアンケート調査結果

表4は、「前ア」と「後ア」の第4問と第5問により、8週間の聴取練習前後の学習者が、促音と長音に対する認識の変容を記したものである。

集計した平均数値からも分かるように、学習者は、促音と長音に対する聞き分けが以前より改善された。

表4 促音と長音に対する認識の変容

		Q4 (促音)	Q5 (長音)
PJ2A	前ア	2.5	2.4
	後ア	3.7	3.3
PJ2B	前ア	2.5	2.3
	後ア	3.6	3.4

さらに、上手く聞き取れない割合（2と1を合わせたもの）を見てみると、促音の場合はAクラスが練習前の20人から練習後の4人に、Bクラスが14人から1人に減った。長音の場合は、Aクラスが23人から6人に、Bクラスが19人から4人に減った。これは、まだ完全ではないが以前より聞き取ることができたことを意味していると考えられる。無論、学習者一人一人の吸収状況が違うのと訓練に費やす時間にも関係しているが、短時間ですべての人を上達させるのには無理があることは否めない。

次は、清濁音の聞き分けの質問をカ行とガ行、タ行とダ行、パ行とバ行の三項目分けて学習者に問うた。結果は表5のようである。

表5 「後ア」清濁音の聞き分け

	Q6.1 (カ・ガ)	Q6.2 (タ・ダ)	Q6.3 (パ・バ)
PJ2A	3.5	2.7	2.7
PJ2B	3.4	2.9	2.9

調査の数字から、第6.1問のカ行とガ行に対して約半数の学習者は、聞き分けることができた。しかし、タ行とダ行、またパ行とバ行の聞き分けには、さほど効果が見られなかった。

また、第7問の「聴取練習後とも聞き取れにくい音」を調査し、語中のタ行とダ行が学習者にとってもっとも区別しにくいことがわかった。

表6 練習後にも聞き取れにくい音

	だ行とな行	だ行とら行	タ行とダ行
PJ2A	21%	9%	70%
PJ2B	8%	8%	83%

「前ア」第7問で「じえ」と「ぜ」、「い」と「ん」の分別に困っていることに対して拍の練習と発音の構造を解説することで問題を解決できたが、タ行とダ行には成果がそれほど出ていない。

3.3 苦手意識の認識

「後ア」第10問の「練習後、どの音が自分にとって区別しにくい音か分かった」に対して、分かった割合（5と4を合わせたもの）は、Aクラスの51%、Bクラスの56%であった。

学習者はまず、自分自身が聞き分けにくい音はどれかを見出さなければ、改善するための対処方法を選ぶことができない。大多数の学習者は、自分の弱いところを自主的に分かろうとしていない。もしくは、知る手段が分からないのである。この点については、今回の聴取練習によって学習者自身が問題意識を持つことができたと言える。

また、「後ア」第3問の「練習後、音節の聞き分けがよくなった」に対してよくなった割合（5と4を合わせたもの）は、それぞれAクラスは54%、Bクラスは65%であり、半数以上の人は成果があった。アンケート調査により学習者が苦手意識を持つ音の中で、音節の弁別ができれば問題を解消できるものがあった。したがって、授業中の練習を通して、拍を再認識させたことで苦手意識のある音の解消ができ、拍感覚を身につけさせることができた。

確かに、今回聴取練習に取り入れた時間はそれほど多くはない。当然、学習者自身の授業後の自主練習の有無が当然学習効果を左右する。また今回は、毎週の宿題⁴のような小テストは行わず、最後の1回の総復習テストしか行わなかった。また、総復習テストは、成績に入らないことを告知したことも学習者が練習しない原因の一つとなった。

⁴学習者は、今回の聴解授業で毎週の宿題と聴取練習の授業後の練習との二つの課題がある。

表7 宿題練習

Q1	はい	いいえ	無効
PJ2A	87%	13%	0%
PJ2B	62%	35%	3%

表8 授業後の聴取練習

Q2	はい	いいえ
PJ2A	28%	72%
PJ2B	47%	53%

表7は、毎週の宿題をしたかどうかのものであり、表8は聴取練習の指導を受けた後も聴取練習の音声を練習したかの設問に対する統計である。夜間部の学習者は、昼間の仕事を口実にする場合がよく見られる。しかし、テストとなれば大多数の学習者は予習・復習する。この点で、教師にとって学習者の学習状況をコントロールするのに、テストは一つの方法であると言える。

4. 反省と考察

聴解教育においては、大意把握を練習させる一方、音素の識別などの正確さを要求することも必要である。しかし、教育現場でこの識別練習はどのように扱われているかを考えると、具体的な指導というと初級での仮名の導入のときだけである。また、正確に音素を識別できなくとも、実際には既有知識や文脈の助けによってコミュニケーションが成り立つこともある。そのため、音の聞き取りが教師・学習者双方であまり問題として認識されていないと言える。音声処理能力を高める一方で、語彙・文法力を養成することにより、聞けるようにする訓練は理想的な聴解授業と考えられるが、教師・学習者双方にとって音声処理能力を高めようとするためには十分な時間と練習を確保しなければならないと考える。

授業後アンケートの調査によると、特殊拍の学習効果がやや上がったが、清濁音は授業前アンケートとは、さほど変わらないことが分かった。まず、原因として考えられるのは、母語の干渉に影響される音声項目は習得しにくいことである。しかし、それ以外に学習者を飽きさせないように配慮する必要もある。毎週わずかな時間を利用し、数回の練習で学習者の聴取が劇的に変化することは難しい。さらに、教師から与えられた知識や練習を自分なりに理解し、取り込むことはたやすいことではなく、時間がかかることも結果に影響する。

今回は、学習者自身の音声聴取の問題点に対する注意を喚起した。しかし、表記や実際の練習について不十分であることが、学習効果が顕著に現れなかった大きな原因だと考える。今後はどのように時間を配分し、効果的な練習を行うことができるのかをさらに考えたい。

なお、特殊拍、清濁音を正確に聞き分け、書き分けるためには、音声を通して指導するだけでは効果が薄れることが推察される。文法や語彙知識を運用するなど、文字から音の違いを認識することも不可欠であろう。

今回の練習を行ったことで、学習効果を上げたとは言い切れない点があるが、学習者自身の音声に対する問題点を捉えさせ、これらの問題点に意識を持たせることで、聴解力だけでなく今後の学習における文法、語彙、作文の習得などにも影響を与えるのではないかと考える。音声聴取練習については授業の中だけでは十分ではないと言え、少なくとも学習者に意識させることで、今後の学習の結果が違ってくると予測される。

おわりに

音声の学習では学習者の個人差が大きく、特に母語の影響が出やすい。モデル発音をいくら与えても、聞き分けができない学習者もいるが、上手く弁別する学習者もいる。教師は学習者がモデル発音を繰り返し聞く際に、どのような意識を持って聞いているのかを把握する必要がある。さらに、何を発音しているのか聞き分けができる学習者は、自分なりの有効な意識基準を持っていると考えられる。その意識基準が何であるのかを究明できれば、より効果的な指導法も提示できるであろう。

今回は短文レベルのディクテーションの練習も取り入れたが、ディクテーションは書く能力が含まれているため、正しく理解しても表記に失敗をしてしまう場合がある。逆に、ディクテーションはできていても意味は理解していないこともある。学習者の誤りが単なる表記上の誤りなのか、意味を理解せず聞いた音をそのまま表記して間違ってしまったのかなど、その音声と表記と意味理解との関係性も明らかにしたい。これらは、今後の課題とする。

参考文献

- 内田 照久 (1993) 「中国人日本語学習者における長音と促音の聴覚的認知の特徴」『教育心理学研究』41 : 414-423。
- 小河原義朗 (1997) 「発音矯正場面における学習者の発音と聞き取りの関係について」『日本語教育』92 : 83-94。
- 小河原義朗、河野俊之 (2009) 『日本語教師のための音声教育を考える本』アルク。
- 国際交流基金 (2009) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第2巻「音声を教える」』ひつじ書房。
- 坂本恵 (2002) 「中国人学習者のための発音指導について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』29 : 171-181。
- 鹿島央 (1995) 「初級音声教育再考」『日本語教育』86 : 103-115。
- 常木由布子、小野正樹 (2003) 「中級聴解クラスにおける中国人学習者のラジオニュースの誤聴分析」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』18 : 125-135。
- 戸田 貴子 (1998) 「日本語学習者による促音・長音・撥音の知覚範疇化」『文藝言語研究 言語篇』33 : 65-82。
- 西郡仁朗、小松恭子、尾崎和香子、馮秋玉 (2004年) 「中国人初級日本語学習者の有声音・無声音の知覚について—マルチメディア教材の開発と学習効果—」, 『日本語研究』23 : 31-45。
- 松崎千香子 (2006) 「中国語母語話者の促音の発音に与えるリズム指導の効果」『甲南国文』53 : 105-120。
- 劉佳琦 (2004) 「中国人日本語学習者における清濁の混同とその方言差」第1回「日本語教育と音声」研究会 早稲田大学 2004 口頭発表。
- 林佐平 (1981) 「初学段階における日本語の音声教育—聴音問題点と母国語の干渉について—」『日本語教育』45 : 133-144。

